

Title	米国留学で音声学へ転向し、多彩な人との出会いの中で研究を深める：杉山由希子准教授に聞く
Sub Title	
Author	田井中, 麻都佳(Tainaka, Madoka)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2017
Jtitle	新版 窮理図解 No.26 (2017. 11) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	インタビュー
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000026-0004">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000026-0004</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



## 米国留学で音声学へ転向し、 多彩な人との出会いの中で研究を深める

中学で英語に触れ、言語による違いに興味を持つようになって、言語学の道へ進んだ杉山さん。修士課程から米国へ留学し、「意味論」について学んだものの、やがて興味は「音声学」へ移っていく。音声を物理的な側面から分析し、対象を客観的に捉える点に惹かれたという。帰国後、母校である慶應義塾大学へ。語学教師として教鞭をとる傍ら、恵まれた環境の中、研究への取り組みをいっそう深めている。

### —どのような幼少期を過ごされたのですか？

生まれは愛知県、両親と弟の4人家族で育ちました。幼い頃から、わが道を行く早熟な子どもで、「幼稚園は暇つぶしに通っている」と発言して、周囲を驚かせたこともあります(笑)。皆でお遊戯をしたり、運動会の練習をしたりするなどの集団行動が苦手でした。

性格は母に似ている部分もありますが、大半は父親譲りです。父は工学系出身で電機メーカーに勤めていたので、仕事の面でも父の要素を受け継いでいます。

### —集団行動ができなくて、ご苦労されたのでしょうか？

中学から中高一貫の私立校に通い、自由な校風に救われました。

中学で英語の面白さに触れたのが、言語学を志した原点です。さらに、教科書に一部が掲載されていた鈴木孝夫先生の著書、『ことばと文化』に感化され、言語による違いに興味を持つようになりました。

例えば、日本語には人が「歩く」「走る」といった動作の容態を説明する語彙はそれほど多くはありませんが、英語にはrun(走る)だけでなく、scurry(ちょこちょこ走る)、scuttle(慌てて走る)、trot(小走りで歩く)など、さまざまな言葉があります。その代わり、日本語は擬態語や擬音語がとても多い。このように、言語によって表現の仕方が異なることで、世の中の見

え方も違っているのかもしれないというのが、最初に抱いた興味です。

そこで、より深く言語について学びたいと思い、慶應義塾大学へ進学しました。慶應大学には、言語学科はありませんが、一般教養科目に言語学があり、言語学関係の授業が豊富なところも魅力でした。

また、三田キャンパスにある言語文化研究所の先生方の授業を受けることができるのも、慶應ならではの強みです。言語学分野にはさまざまな教授陣がいらして、実のある学生生活を送ることができました。

### —最初から、研究者の道に進もうと思われていたのですか？

まったくそうではありませんでした。4年で卒業後、就職するものだとばかり思っていたのですが、いざ、3年の終わりになるとどうしてもそういう気持ちになれず、かといって、言語学の研究者になって、自分に何ができるだろうと悩みました。そこで指導教授に相談したところ、「僕だって最初は自分が立派な研究者になれると思って進学したわけではないよ。興味があれば、続けてみたら」と言われて、心の整理ができました。結局、母の反対を押し切ってというか、諦めてもらって、卒業した年の9月に米国のニューヨーク州立大学バッファロー校に留学しました。

アメリカの大学に進学したのは、日本に言語学を系統的に学べる大学がほとんどなかったことに加え、慶應で言語学の授業を取った時に、先生方の多くがアメリカの大学院のご出身だったという理由です。また、バッファローの大学には私が教えるを乞いたい研究者がいらっしゃいました。

ところが、最初は言語学の中の「意味論」について学んでいたものの、しだいに現在の研究テーマである「音声学」へ興味移ってゆきました。話者の意識が介在し、場合によっては主観と客観の区別が難しい意味論とは異なり、物理的な観察対象がある音声学の明確さに惹かれました。

留学を通じて、さまざまな出会いもありました。国費で留学しているアフリカ・トーゴ出身の学生の質素な生活ぶりを見て、日本の恵まれた環境を実感したり、サウジアラビアの学生から母国の言語統制について聞かされ、国や文化の多様性を肌身で



音声は身近なものでありながら、研究するにはさまざまな分野の知を必要とします。

人の話す、聞くには、人間の認知機能の精緻さが凝縮されています。

## 杉山 由希子

Yukiko Sugiyama

愛知県出身。専門は言語学、音声学。主に日本語を題材にして音声分析や知覚実験を行い、音声コミュニケーションの仕組みについて研究している。慶應義塾大学文学部英米文学科卒業。ニューヨーク州立大学バッファロー校 (University at Buffalo, The State University of New York) 言語学部修士課程を経て、2008年博士課程修了、博士(言語学)。2009年慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室専任講師、同大学言語文化研究所兼担所員、2016年同大学准教授。2017年ベストレクチャー賞受賞。



感じたりもしました。

結局、途中で音声学に研究の軸足を移したこともあり、バッファローでの研究生生活は9年に及びました。日本に戻ってきたのは、2008年のことです。

——早稲田大学の非常勤講師を経て、2009年から慶應義塾大学に着任されました。

理工学部の英語の教員として採用されたことは、研究を進めるうえで、とてもよかったと思っています。理工学部は、学生と教職員の距離が近く、学生へのフォローが手厚いのも特徴です。私自身、学生に混じって応用数学の授業を受けたり、学生から音波の分析に欠かせないフーリエ解析などについて教えてもらったりできるのも、学部内のそうした雰囲気があるからこそです。

それから、慶應に戻ってきて感慨深かったのは、学部の頃に聞いていたNHKラジオ・ロシア語講座の講師をなさっていた金田一真澄先生や、渡米前に留学のご相談をさせていただいた小原京子先生と一緒に仕事をすることが得られたこと。

もう1つ、3～4年ほど前から、言語文化研究所が主催している、「マイボイス」という、自動音声読み上げのためのソフトの使い方を紹介するワークショップのお手伝いをしています。声を事前に録音しておく必要はありますが、このソフトを使うと、病気などで声を失ったり、しゃべれなくなったりしても、自分の声で周囲とコミュニケーションをとることができます。

普段、声について意識することはあまりないかもしれませんが。しかし、実は声というのは、その人のアイデンティティを示す非常に重要な要素なんです。私自身、この活動を通じてそのことを再認識しました。より多くの方にマイボイスの存在を知っていただき、活用していただければと思っています。

——休日の過ごし方は？

トレイルランニングや登山などでリフレッシュしています。トレイルランニングというのは、簡単に言うと、山を走る競技のこと。よく行くのは高尾や丹沢の山などで、あらかじめ地図でルートをいくつか考えておいて、早朝から山に出かけます。

景色のいいところを走ると、とてもいい気分転換になります。

◎ちょっと一言◎

学生さんから：

●「音声」に興味を持ち、杉山先生の授業を受講しました。やさしいけれど指導には熱心で、ときには学生に先生役を任せるなど、講義にもさまざまな工夫があり、先生ご自身も学生と一緒に楽しんでいらっしゃるようです。先生にご紹介いただいた「マイボイス」の編集作業もお手伝いしていますが、医師や作業療法士の方との共同作業を通じて、世界が広がります。

(取材・構成 田井中麻都佳)

さらに詳しい内容は .....  
<http://www.st.keio.ac.jp/kyurizukai>